

設計	キノシタヒロシ建築設計事務所
施工	令和建設
竣工日	2023年3月1日

◎建物概要

建設地	鳥取県鳥取市
敷地面積	125.17㎡
延床面積	92.57㎡
構造・規模	木造軸組2階建

◎設備面の特記

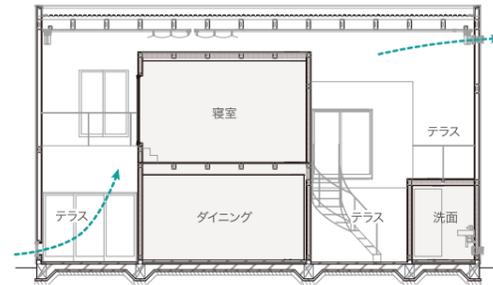
厨房機器	IHクッキングヒーター
給湯機器	ガス給湯器
冷暖房機器	エアコン



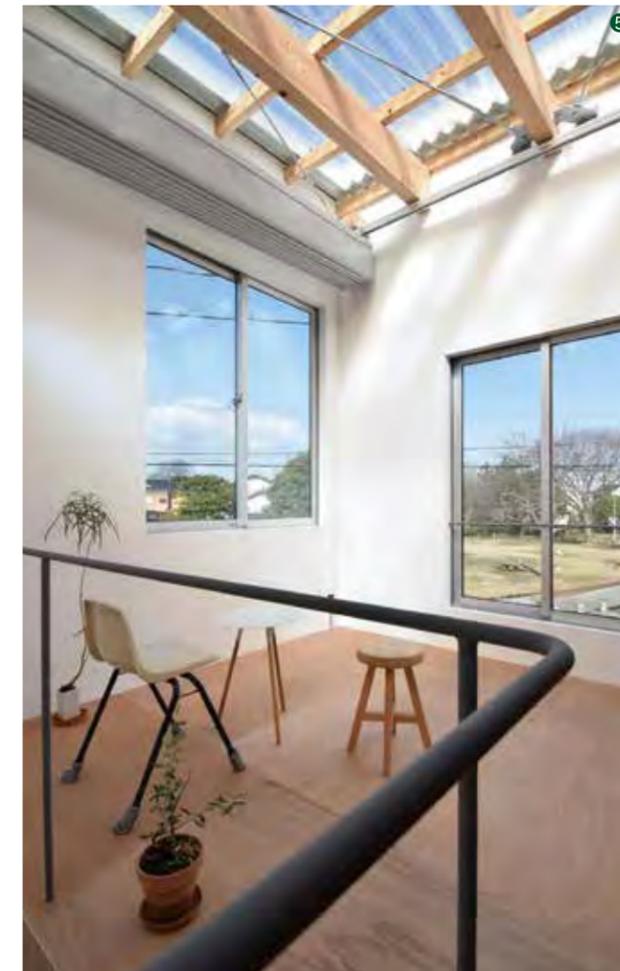
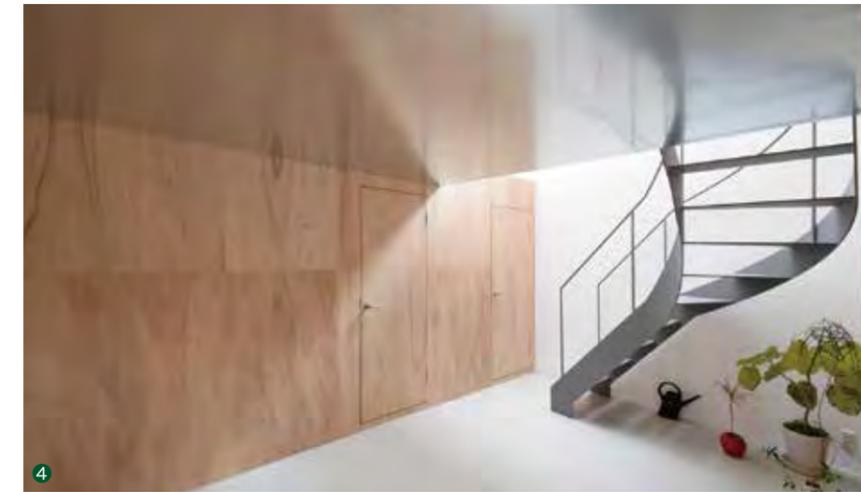
① 部屋と屋内庭が織り交ざる。大きな部屋を南側に寄せたり、部屋を浮かせて暗がりをつくることで、明るさが一様にならない生活の場を創りだした。
② 階段のある吹き抜けからも上から太陽光が降ってくる。



断面図



③ 2階寝室。積雪の時期の屋内庭は暗がりとなるため、屋内庭の壁色を白色に。部屋は落ち着いた色合いでまとめている。
④ 屋内庭はカフェテラスのような趣があり、雨の日の多い山陰でも明るい生活を送ることができる。



⑤ プライバシーを守るためにカーテンが閉じられると陰鬱な生活になりがちである。この住宅の屋内庭では、曇り空でも日光浴ができ、脳内のセロトニンの分泌を促しストレス軽減やうつ病の予防なども期待できる。
⑥ 冬場、屋内庭はサンルームのようにこの家を暖める。反対に夏場の日差しの厳しい季節には、テントを庇のように閉じ、屋根裏換気により排熱。日陰となる箇所に設けた地窓から冷気を取り込む。
⑦ 核となる居住スペースは小さな気積でまとめ、それぞれを6畳のルームエアコンで空調。その空気を居住スペース内で循環させている。

設計コンセプト

敷地のある鳥取県は山陽側と比べて雨の降る日数がおおよそ2倍多く、積雪もあるため外部庭の有用性に恵まれていない。そこで、本来外部にある庭を屋内に取り込み、部屋と屋内庭を織り混ぜた住宅を提案した。屋根は全面半透明とした。それにより屋内庭は、純度の高い自然素材である陽光で満たされ、可動式テントの開閉の程度により日射量を調整し、屋根裏に設置した換気扇の排気風量を制御することで温度の調整を行う。入れ子状に設けた部屋にはしっかりとした気密性と断熱性をもたせた熱的境界を敷き、24時間換気を利用して部屋内の空気を循環させて快適性を保つようしている。屋内庭にもソファ、書斎机、本棚、ハンモックなどの家具が置かれ、太陽光の下で読書したり子どもと遊ぶなどして過ごす。

空間の快適性を考えていくとき、面積を広げたり天井を高くしたりと空間の容積を大きくして開放性をもたせていく方法がある。しかし、山陰のような気候が厳しい地域では、空間の容積が大きくなると空調効率が落ちてしまい、より容量の大きなエアコンやストーブが必要になる。この住宅では核となる居住スペースは小さな気積でまとめ、それぞれを小さなルームエアコンで空調し、その空気を居住スペース内で循環させている。小さな気積の部屋と大きな気積をもつ屋内庭とを織り混ぜたような構成によって、温熱環境の厳しい季節は小さく暮らし、過ごしやすき季節にはサッシを開放してのびのびと過ごす。

審査委員講評

大きな気積の中に巧みに配された小さな居室によって、屋内にしながら外部を感じることができる豊かな住空間を実現している。この地における気候風土を加味した大らかな一室空間の構造と、コストコントロールを踏まえた材質の組み合わせにより、暮らしの多様さを生み出す意欲的作品である。



高吉 輝樹

TT Architects 株式会社

【作品名】
広葉の家

設計 TT Architects 株式会社
 施工 株式会社 道下工務店
 竣工日 2021年1月31日

◎建物概要

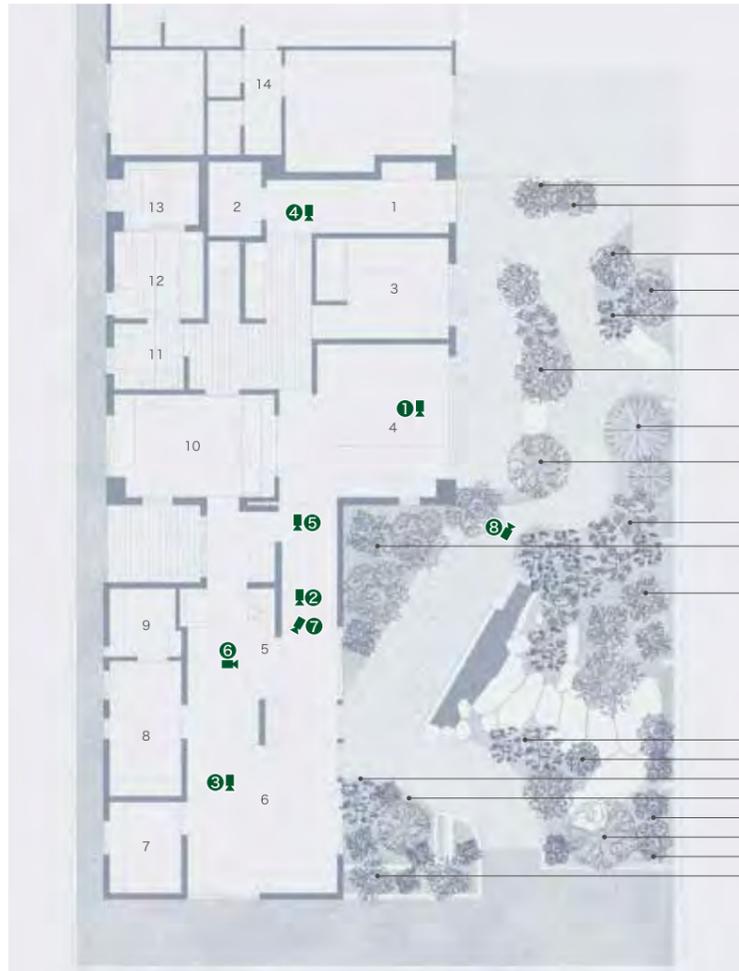
建設地 広島県福山市
 敷地面積 671.93㎡
 延床面積 374.39㎡
 構造・規模 S造(一部木造)・2階建

◎設備面の特記

厨房機器 ガスコンロ
 給湯機器 エコキュート
 冷暖房機器 エアコン

平面図

- 1 玄関
- 2 SIC
- 3 応接室
- 4 リビング
- 5 キッチン
- 6 ダイニング
- 7 納戸
- 8 家事室
- 9 パントリー
- 10 寝室
- 11 WC
- 12 洗面脱衣室
- 13 浴室
- 14 既存医室



- カマツカ[鎌柄] 4-5月
- ハウチワカエデ[羽団扇楓] 5-6月
- クロバナロウバイ[黒花銀梅] 5-6月
- シャシャンボ[小川坊] 7月
- フナ[榎] 5月
- アズキナシ[小豆梨] 5-6月
- カツラ[桂] 3-5月
- ハクウンボク[白雲木] 5-6月
- コバノズイナ[小葉の鶴菜] 5-6月
- ナナミノキ[七実の木] 6月
- マユミ[真弓] 5-6月
- ヤマボウシ[山法師] 6-7月
- カラタネオガタマ[唐種招童] 5-6月
- アオハダ[青膚] 5-6月
- ハクウンボク[白雲木] 5-6月
- コマユミ[小真弓] 5-6月
- ヤマザクラ[山桜] 3-4月
- ソヨゴ[冬青] 5-6月
- エゴノキ 5-6月



設計コンセプト

5人の子育ても終わりかけたころ、ご主人が突然の病で他界された。「落ち着いたら取り掛かるうね」と二人で話をしていたリフォームが、奥様の念願となった。「健康」な住まいとは何か、建築における「健全さ」とは何か、という問いに答えることが、今回わたしに与えられた役割に思えた。太陽蓄熱を利用した室内温度の安定化、アルミ押出材と木製の複合サッシによる高断熱化、セントラル浄水器を使用して上水の塩素や汚れを除去、そういった基本的性能を上げていった。しかし、性能は次々に新しい技術が登場して古くなっていく。年月が経っても色褪せない全体に通底する考え方はないのか。民藝では「無事」とか「健康」という表現をする。一緒に暮らす

器や、衣類、家具などを選ぶ際に、「健全さ」を第一の物差しとする考え方である。日本では良くも悪くも茶道の影響があり、凝った遊びに走りがちとなる。その点での良識を目指しているのが民藝で、「健全さ」を心掛けようとするのである。民藝は、「材料が天然材であること。手仕事によること。伝統に沿った技術で作られること」この3点がまず求められる。これを建築にも取り入れることを考えた。建築は、残念ながら音楽のように一瞬で人の心を高揚させたり感動させたりはできない。ただ微力ながら、少しずつ影響力を発揮しており、その力は相対的に見て大きなものである。建築とは人間の生を支える存在でなければならない。

審査委員講評

OMソーラーやセントラル浄水器等の設備機器、高性能な断熱材やサッシの採用に留まらず「民藝」の精神を掲げ所に仕上げやディテールを考えたリフォーム作品です。天然木や塗り壁等の自然素材にこだわり、健康でおおらかな空間に好感が持てます。また密度のある植栽もこの住宅の価値を一層高めています。生活風景を思い描かせると共に設計者の卓越した手腕を感じさせる作品です。



①②③「材料が天然材であること。手仕事によること。伝統に沿った技術で作られること」の3点が求められる民藝を建築にも取り入れることを考えた。全体的に瘦せた表現や神経質なディテールは避けて、家全体がおおらかでゆったりとした空気感で満たされるよう配慮した。



④⑤床材はクルミの無垢材、天井材はトガの羽目板を使用。壁は柔らかさを出すために漆喰に砂を混ぜて押さえすぎないようにしている。造作材、建具、家具についてもナラ、タモの無垢材と突板で統一している。



⑥⑦「台所を暮らしの中心にしたい」という施主の要望から、家の中央にキッチンを設置。ペニンシュラ型の前面がオープンとなっているキッチンでは、友人を招いて食事をしたり、孫と一緒に料理を作ったり、食を通じた会話が生まれる。

⑧庭は、東西に長く伸びて建物の平面形状に呼応するように配置されている。そのことにより、玄関から応接間、リビング、ダイニングキッチンという一連の動線が生まれ、庭との視線が絶えないよう設計されている。

優秀賞

設計 一級建築士事務所 岸本泰三建築設計室
 施工 有限会社 クラフトハウス
 竣工日 2023年9月27日

◎建物概要

建設地 岡山県美作市
 敷地面積 702.48㎡
 延床面積 156.53㎡
 構造・規模 木造平屋建

◎設備面の特記

厨房機器 ガスコンロ
 給湯機器 エコジョーズ
 冷暖房機器 エアコン・薪ストーブ

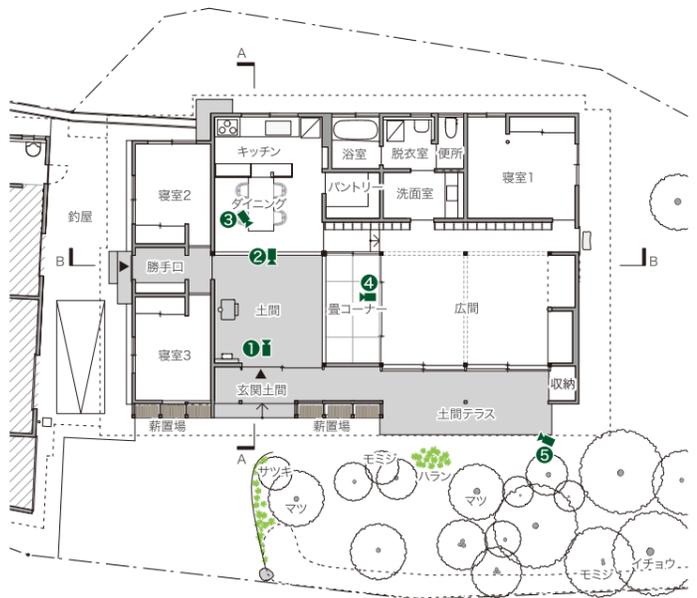
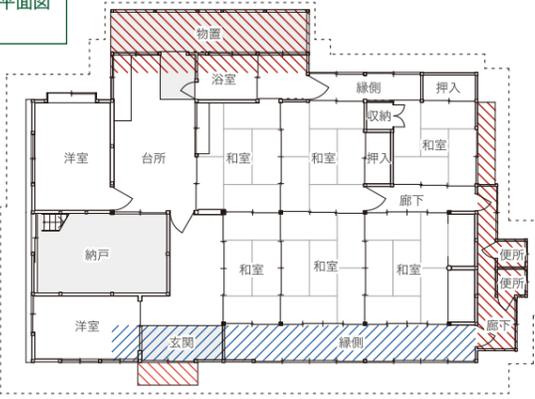


before



after

平面図

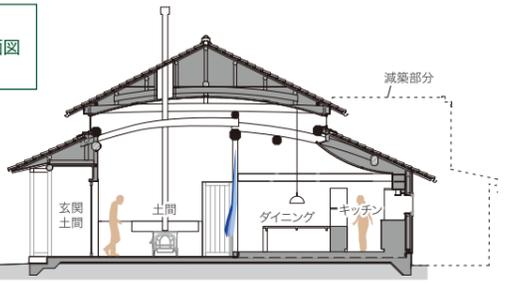


リフォーム後



リフォーム前
 減築範囲を示す
 外部化した範囲を示す

断面図



A断面図



B断面図

設計コンセプト

岡山県北部の古民家の再生計画である。施主は両親が亡くなられて長く空き家になっていた家に、定年を機にUターンを決めた。近い将来、兄妹も集まって田舎暮らしを楽しむことが与条件である。建築当初は茅葺屋根であったこの民家は、家族構成に合わせて、間取りや屋根の改修など、住みながら手を加えられている。今回の再生計画では、構造的な補強と、主に昭和50年代に増築・改修された部分の減築を行い、住宅の架構をシンプルな長方形に戻した。当初材の栗や樺の柱、大きく曲がった梁、黒く煤けた土壁は、建築当初からこの場所で生活の中にあっただものである。生活様式の変遷を経て再び生活空間の場に現われた。

現代の田舎暮らしで魅力的なスペースになる土間空間を、住まいの内部と外部の両方に広く計画した。玄関は曖昧で、外部の土間から内部土間の薪ストーブのある場所が、ご近所とのコミュニケーションの場となるはずである。その設えの一つとして藍染作家に協力いただいた暖簾が、土間とダイニングを緩やかに仕切っている。この計画は、施主ご夫婦と兄妹が再び集まって暮らすという住まい方が特徴的である。個人の空間は最小限担保した上で、家族のCOMMONスペース(土間・広間)を広く計画した。江戸末期と思われる古い材料や初期の間取り、柱・梁を最大限に活かしつつ、終の棲家としても対応できる柔軟性のある計画を提案した。

審査委員講評

家族にとって大切な時間を過ごした古民家の面影を残しながら、心地よい空間へとリノベーションさせた住宅。既存の骨格を活かしながら構造補強を施し、現代の暮らしへと更新させている姿から、設計者の技量を感じさせる。内外の土間空間と薪ストーブを中心に付随する畳の小さがり空間は、これから近隣住民と過ごしながら未来へ住み継がれていく豊かさを想像させた。



1



2

① 土間よりダイニングを見る。藍染作家の手による暖簾が土間とダイニングを緩やかに仕切り、玄関の存在を曖昧にすることで、土間テラスと薪ストーブのある場所が近所の人とのコミュニケーションの場となる。



3



4



5

②③ 土間に使われている栗や樺の柱、大きく曲がった梁、黒く煤けた土壁は建築当初から生活の中にあっただ。構造補強のために追加した梁も、工務店が同時期に解体した民家の現場から出た古材を再利用。新規材料はすべて自然素材を使用し、時を経てこの空間に溶け込んでいくことを目指した。
 ④ 土間の薪ストーブをCOMMONスペースの中心に据えてダイニングや畳コーナーが、家族はもちろん、近隣住民とのコミュニケーションに寄り添う場となる。
 ⑤ 広間の南側にあった縁側は、外部化して土間テラスへ。土間テラスと内部の土間、さらに勝手口へと続き、玄関土間を介して土足のまま移動できるよう、連続する土間の平面計画を採用した。

設計	株式会社 小松隼人建築設計事務所
施工	田村建設工業
竣工日	2021年12月23日

◎建物概要

建設地	広島県広島市
敷地面積	527.35㎡
延床面積	217.40㎡
構造・規模	木造2階建

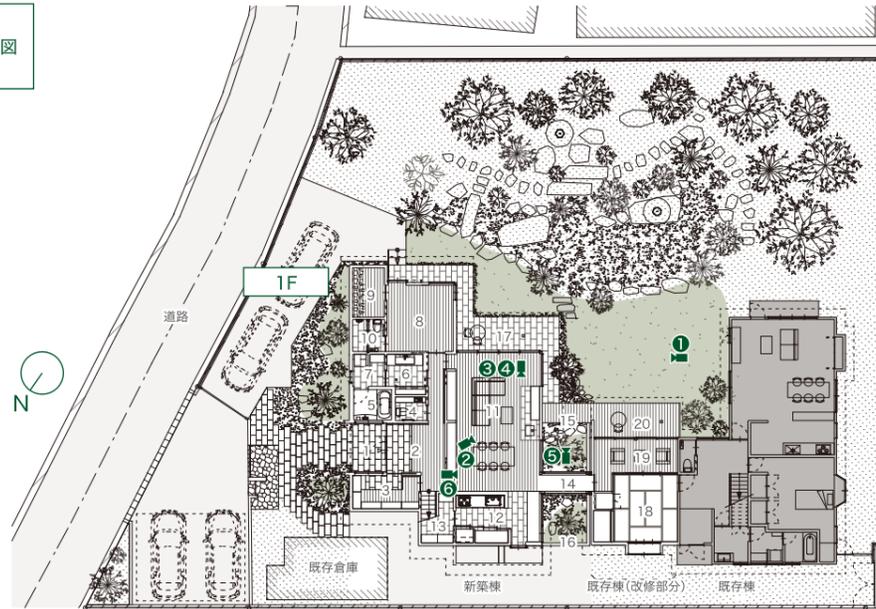
◎設備面の特記

厨房機器	ガスコンロ
給湯機器	ガス給湯機
冷暖房機器	エアコン



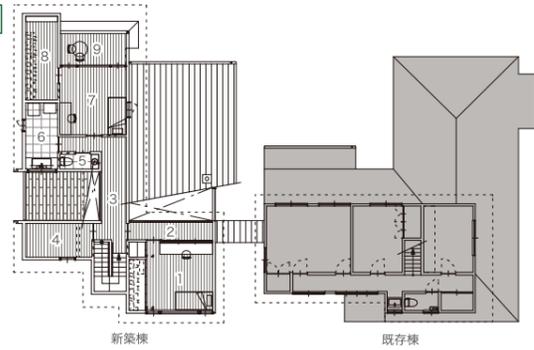
①西外観。南の日本庭園と新設した樹木がなじむような植栽計画とするとともに、西側隣地からの視線も植栽によって調整している。写真左は既存棟。築60年家屋の解体時に和室の仕上げを可能な限り取り外し、部分リノベーションした既存棟の客室に採用した。

平面図



- 1 ポーチ
- 2 玄関ホール
- 3 SC
- 4 トイレ1
- 5 浴室
- 6 洗面室1
- 7 脱衣室
- 8 寝室1
- 9 WIC1
- 10 トイレ2
- 11 リビングダイニング
- 12 キッチン
- 13 バントリー
- 14 回廊1
- 15 中庭1
- 16 中庭2
- 17 濡れ縁1
- 18 客室
- 19 広縁
- 20 濡れ縁2

2F



- 1 寝室2
- 2 回廊2
- 3 回廊3
- 4 納戸
- 5 トイレ3
- 6 洗面室2
- 7 寝室3
- 8 WIC2
- 9 バルコニー

設計コンセプト

広島市の西部に建つ住宅。60年前に平屋住宅が建っていたが、その30年後に増築を行い大きな棟へと変遷していた。この築60年の棟を新たに建て替え、新築棟に親世帯、既存棟に子世帯が暮らす計画である。この諸室も庭園側に開くように計画すると南西に開いた平面計画となり、南東に開く既存棟と対称の配置が導かれた。互いの棟に十分な隙間を空けて風道をつくり、隙間は庭園の新たな要素としての中庭とし、回廊1を配置して棟間を繋いでいる。既存棟の一部は客間として改修して、濡れ縁を新築棟まで繋げることで回遊動線をつかった。濡れ縁から入る風を2階の諸室まで通すことで空気循環を促し、季節の変化によって主室に冷気と暖気を溜める空気滞留も

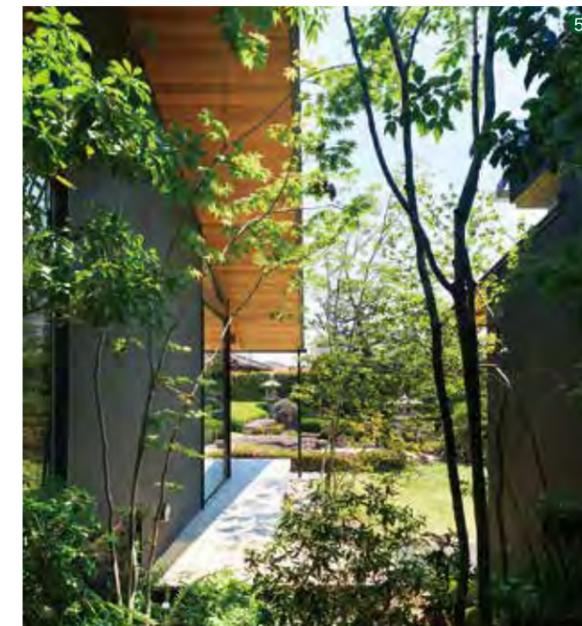
つくりたいと考えた。まず各階の小屋裏をなくし、屋根勾配なりの天井とする。この1階の天井と2階の床のずれによって生まれた隙間に可動ルーバーを設置すると回廊2は空気調整室となり、窓を開放すると温度差換気により濡れ縁からの風がルーバーを通り抜け、閉じることで主室の空気を滞留させた。採光は濡れ縁からだけでなく中庭から光を取り込むと共に、2階から差し込む直射光を可動ルーバーに通過させて穏やかに取り込む。空気同様にルーバーの開閉で採光量も調整することができる。広大な敷地と新旧の棟の接続方法から風道を導き、可動ルーバーによって風道の調整を行うことで、豊かな庭と共に風を感じながら暮らすことのできる住宅である。

審査委員講評

新築部門ですが築30年部分を残し築60年部分建て替えた半リフォームの作品です。広い南庭に対して雁行する配置や、既存ボリュームとは中庭・濡れ縁を介して適度な距離感を保つなど巧みな平面計画です。断面も2階の廊下ルーバーの開閉によって風や温度環境、採光を調整するなど、中庭の通風、間接光と共にLDKの環境をうまくコントロールしています。全体的にバランスの取れた完成度の高い作品です。



②③④各階の小屋裏をなくし、屋根勾配なりの勾配天井とした。1階の天井と2階の床のずれの隙間に可動ルーバーを設置。ルーバーの開放時は2階の回廊まで視線が通り抜け、ルーバーを閉じることでLDKの熱環境を調整できる。



⑤⑥敷地の南側の日本庭園と、北側に配置された建築という構図に中庭を差し込んだ。このことで東西に流れる風が南北にも抜け、両棟の住環境が豊かになった。既存棟によって西日を遮りながら、日中の穏やかな光を採り込んでいる。

新築住宅部門
審査委員特別賞

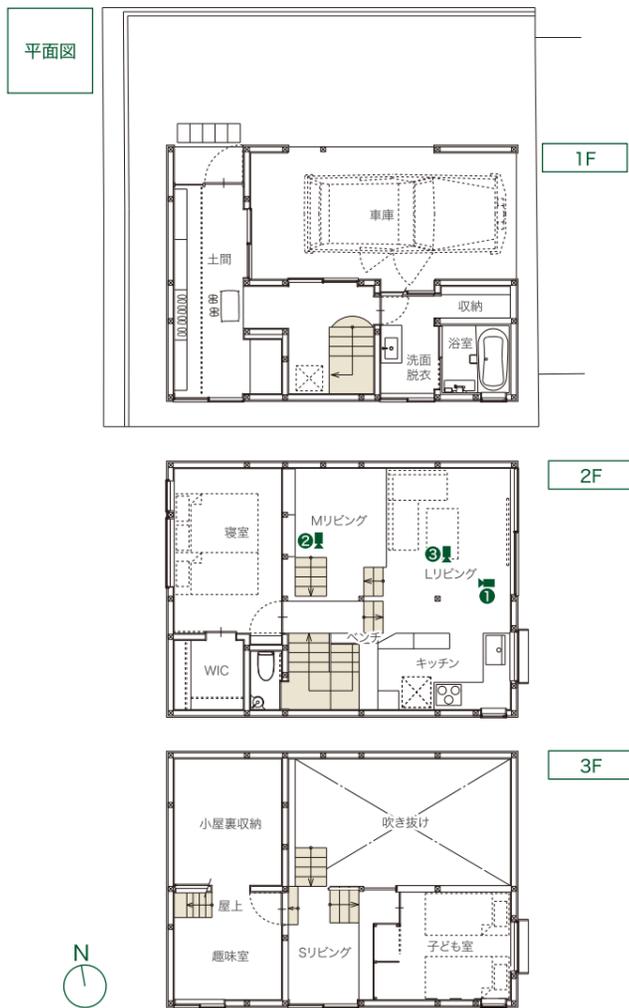
土床 拓也
土床建築事務所
【作品名】
Through House



設計 土床建築事務所
施工 株式会社 内藤組
竣工日 2023年3月10日

◎建物概要
建設地 島根県松江市
敷地面積 103.37㎡
延床面積 119.23㎡
構造・規模 木造3階建

◎設備面の特記
厨房機器 IHクッキングヒーター
給湯機器 エコキュート
冷暖房機器 エアコン



① 2階のM、Lリビング。床はメンテナンス性、コスト重視のPタイルを採用。壁はクロスとラワン合板(ステイン塗り)とし、空間にメリハリを設けた。



② S、M、Lリビング。上棟時の木構造の美しさや力強さを住宅の中心に残した。奥に見える上階は子ども部屋。小階段によって小屋屋を繋ぎ合わせ、回遊性を設けることで生活にアクティビティを生み出す。
③ 2階キッチン。L型キッチンとし、食器棚で空間を仕切り、階段上の余ったスペースに浮き家具(食器棚)を計画。

設計コンセプト

敷地は島根県松江市の住宅街に計画された住宅である。31坪とコンパクトな敷地にインナーガレージ付の住宅を望まれた。狭小地の住宅設計が求められ、コスト制限とともにミニマムな設計を当初より必要とした。その中で容積率をフルに使い、いかに生活領域を大きく創造できるかを考えた。
大きなリビングをつくるのではなく、小さなリビングがたくさんある住宅の方が、生活のアクティビティが広がると考えた。S、M、Lと名付けた気積の違う大小のリビングが廊下のように連なり、視線の抜け、段差によって各々の生活の居場所をつくりだす。空間の無駄をなくすため、らせん状に連なった階段の動線上に、リビングや洗濯場などの用途を

配置し、空間を有効的に活用する。
3階建て住宅でありながら高さ制限のため、建物の高さを抑える必要があった。北側斜線の制限を受け、日影制限、天空率計算を行い、天井の高さを確保しながら建物の高さを8.5mに抑えた。
各部屋をスキップフロアで構成し、高さの大小を組み込み、ズレによってできる視線の抜けを操作して設計。部屋ごとに必要な天井高を確保するため、仕上げの工程を削り、天井は構造材を現しとし、構造材のもつ美しさや力強さ、素材感としての温かみを味わうことのできる空間となった。

審査委員講評

約30坪の敷地に立つ住宅にリビングが3つもある。リビングは家の主役であり、老若男女を問わず伝わるこのわかりやすいプランの魅力は、住宅設計にとっても大切なことです。スキップフロアで展開するそれ以外の空間も広さやデザイン共に緻密につくり込まれ、断熱など快適性も含めた設計の丁寧さ＝住み手への配慮を設計全体から感じとることができ、共感と尊敬の念を抱きました。

新築住宅部門
審査委員特別賞

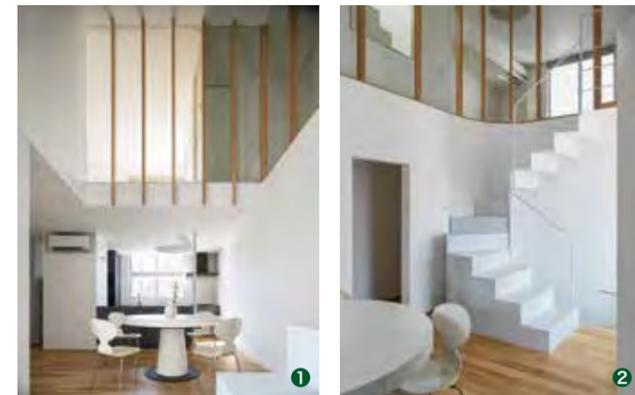
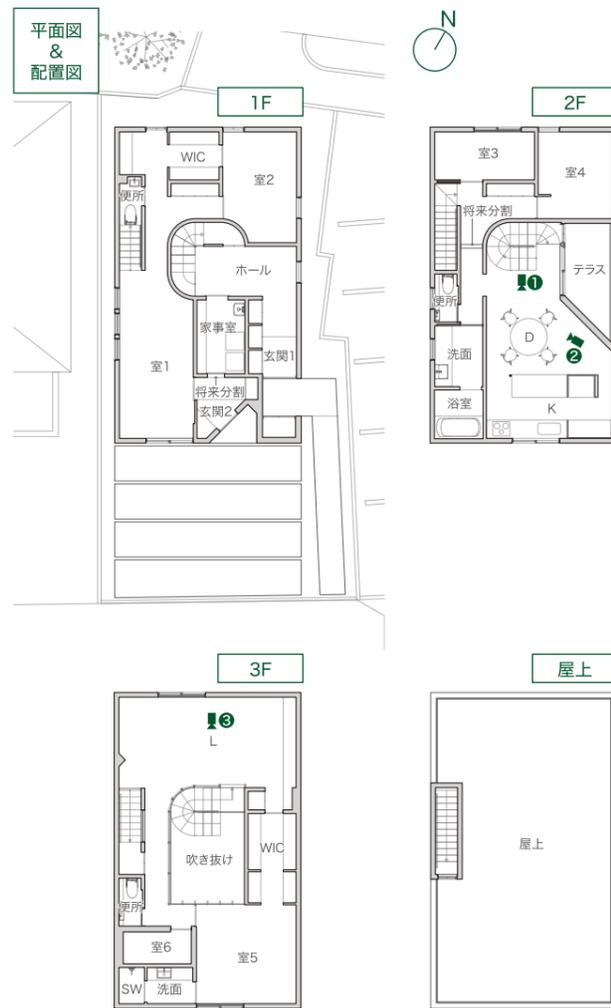
吉田 豊
吉田豊建築設計事務所
【作品名】
牛田本町の家



設計 吉田豊建築設計事務所
施工 有限会社 ハウジング西本
竣工日 2022年8月11日

◎建物概要
建設地 広島県広島市
敷地面積 144.26㎡
延床面積 194.43㎡
構造・規模 木造3階建

◎設備面の特記
厨房機器 IHクッキングヒーター
給湯機器 ガス給湯器
冷暖房機器 エアコン・床暖房



① 2階のダイニングキッチン。3階の開口部からも光が注ぎ、日中は常に様々な向きの開口部からの柔らかな光に包まれている。
② 1階から3階まで貫く螺旋状階段。2層にまたがるLDK空間を、動線、そして視覚的効果として接続している。



③ 3階リビングから吹き抜けを見る。吹き抜けのガラス越しに水平方向、下階方向へと視線が繋がる。

設計コンセプト

敷地周囲は西・北側に低層住宅が隣接し、東側の幹線道路沿いには中層の店舗付き集合住宅の立ち並んだ街路景観が形成されている。
三世代6人家族の住まいとして家族それぞれの居場所があること、また家族構成の将来変動を見据えた計画が求められた。二世代目となる夫婦だけの生活を見据え、間仕切り壁を追加し、水回りを増設することで、新たな二世帯の住宅へと変化する時間軸を持った住宅計画となっている。
中層の街路景観に溶け込むように矩形のボリュームを重層させた内部は、将来の改装時の手数を最小限にするように、諸室構成と動線設定を丁寧にシミュレーションし、壁を2箇所新設することで住戸が完全に分離される計画とした。各々

の諸室は中央のらせん階段やその他の階段によって縦方向に繋ぎ、動線が互いに絡まることで、立体的に回遊可能な構成となっている。
この内部空間の連続体に、テラスや吹き抜けを挿入し、上下、水平、斜めへと様々な抜けをつくり、その延長に外部へそっと繋がる開口部を重ねることで、様々な方向から差し込む優しい光に包まれた白い闇のような空間を創出した。2つに分節可能な生活の場を単純な箱の中で絡め合いながら集約させたこの住宅は、内部空間同士の立体的な交錯の先の開口部と共に、手を伸ばすようにやさしく周辺環境に繋がる生活の場として結実した。

審査委員講評

外観のシンプルな佇まいから一転、内部では2つの階段による立体的で回遊性をもった有機的な空間が広がっている印象的な住宅である。将来を見据えた三世代の暮らしを考えた空間構成は、まさに住宅とは動的なものであることをあらためて感じさせると同時に、現在から未来へ向けた多様な可変性を持ち合わせた計画として実現している。

矢澤 青大

東京都立大学大学院

【作品名】

四季を旅する巣まい

-燕から学ぶ気候によって変化する暮らし-



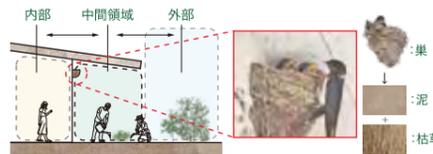
01 敷地：静岡県浜松市引佐白岩

敷地は、静岡県浜松市引佐白岩。都市から離れた周囲をみかん畑に囲まれ起伏を持つ土地である。住民は、みかん農家を営む夫婦であり農具等を置く納屋が求められる。



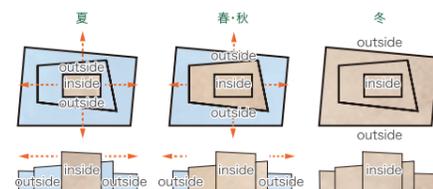
02 燕から学ぶ快適な住処

渡り鳥である燕は、快適な住処を本能で知っている。燕は、春と共に日本を訪れ、風通しの良い軒先などの中間領域に周辺から採集した泥と草で巣を作る。燕の巣作りを参考にし、外部と内部を持つ中間領域について再考することで、快適性を担保しつつ、自然との共生を可能にする住まいを作れるのではないだろうか。燕は、季節に応じて住処を変えられることができる。しかし人間は、何年もの間同じ住処で暮らしていく。そこで四季の気候に応じて間取りを変え、中間領域が変化していく住処を設計する。



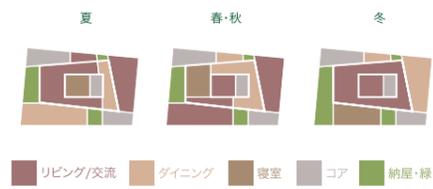
03 三層の平面構成で中間領域を作り出す

平面を三層の壁によって間取りを構成し、層を角度を振った台形にする。角度をつけたことにより立ち上がる空間に大小が生まれ、多様な性質を持った居場所ができあがる。平面構成を三層にしたことで建具の開け閉めによって壁と壁の間に内部と外部の両方の特性を持つ中間領域が拡大縮小する。住人は拡大縮小する中間領域で季節の変化を全身で享受する。燕が巣を作る場所を迷ってしまう、そんな空間が出来上がる。



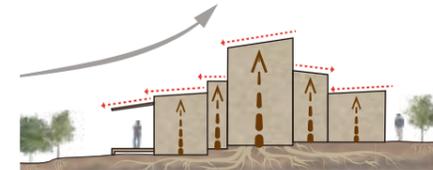
04 季節による居場所の変化

夏は、外側2つの層を開放し涼しげな空間が拡張される。春・秋には内部と外部の空間を等しく楽しむ。冬になると三層目の建具を閉じ、住宅全体が温かい空間に包まれる。冬はみかんの収穫の時期であり、納屋は拡張され、燕がみかん畑を飛び回るころ再び春がやってくる。



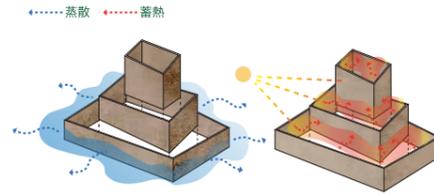
05 大地に根を張る建築

ボリュームを地形に沿って立ち上げ、屋根勾配の操作によって有機的なリズムを生み出す。敷地の高低差や石、木、土などの土地の特性を活かすことで大地から立ち上がり、根を張ったような周囲に溶け込む建築となり時間と共に新しい風景として佇む。燕は、来春もこの家に巣を作る。



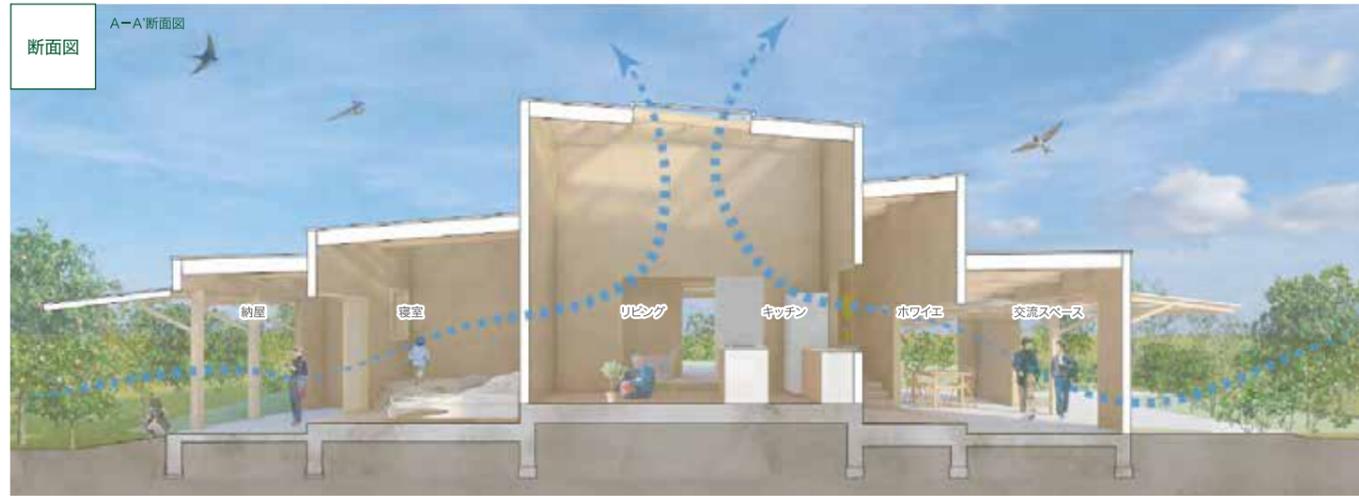
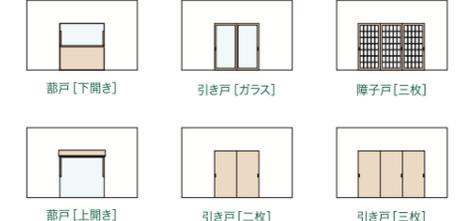
06 微気候を作り出し自然に帰る土壁

燕は、現地で調達した泥や枯草を使って巣を作る。役目を終えた巣は再利用されるか、壊れた際には自然に帰る。敷地の地名にもなっている白岩の土と糞すさで日本の伝統的な土壁を制作する。土壁の三層によるレイヤーが蓄熱・蒸散することで住居内に快適な微気候を作り出す。



07 環境を緩やかに繋ぐ建具

建具はこの住居の間取りを動的な物に変える役割を持ち、同時に外部と内部をゆるやかに繋ぐ境界線となる。よって扉戸や引き戸など開放性の高い建具を多く使用した。



設計コンセプト

燕は、春と共に日本を訪れる。渡り鳥である燕は、快適な居場所を本能で知っている。燕は、現地で調達した泥と草を使って、住宅の風通しの良い軒先などに巣を作る。燕の巣作りを参考に、内部と外部、両方の特徴を持つ中間領域について再考することで、快適性を担保しつつ、自然環境との共生を可能にする豊かな住処を作れるのではないだろうか。そこで私は、自然環境との接点となる中間領域に着目し、四季の変化に応じて間取りを変え、中間領域が変化していく住処を設計する。敷地は、静岡県浜松市引佐白岩のみかん畑。地名の通り白岩という地層からなる自然豊かな地域である。この地に建つこの

審査委員講評

間取りが変わり、住み手が移動しながら暮らすという斬新な設計プランは、一見、現実性を疑ってしまいました。しかし、それが季節の移り変わりを住みながら感じさせ、建具を巧みに使い可変する半屋外の空間で、人間の住みこなす能力を引き出す温故知新のものと正当性を帯びてきます。静岡のみかん農家を想定したプランですが、敷地の場所を問わず広く応用できる普遍性を感じました。



セカンドリビングからテラスを見る。畑と連続的に繋がる感覚を持つ。 納屋に暖かな光が入り込む。よく使う農具や収穫物も収納される。 寝室とダイニングを見る。土に包まれ、ゆるやかな時間が流れる。 談話スペースに光が入り込む。燕が住宅内を飛ぶような開放的な空間。

学生部門 優秀賞

篠村 悠人
近畿大学大学院
【作品名】
地球に住まう家

太陽、土、水、緑といった地球を肌で感じられること。
それは我々が生きる上での最高の豊かさであり、時間を超えていく普遍性を持っている。
その豊かさの基盤である地球を整える。
またその行為によって生まれる自然現象を享受できる器を提案する。

郊外：東広島市 -残したい風景-

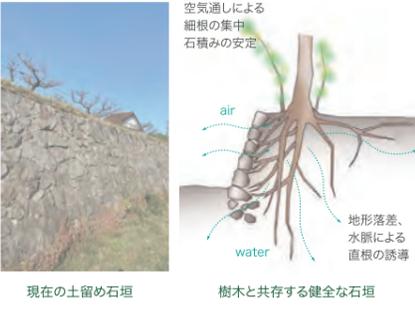
広島県東広島市、田畑に囲まれる豊かな環境の土地を計画地として選定した。近所に住まわれていたご夫婦をベルソナの対象とし、ご夫婦の田畑のある風景を残していきたいという想いを内包した、地球に住む喜びの感じられる住まいを提案する。



昔と今を比べると埋め立てられている場所や放置されている場所が年々増加していることを調査を通して知ることができた。里山の風景を残すためには、豊かな自然や暮らしを体感することによる、若い世代への意識共有が必要だと感じた。

石垣の健全化 -自然を整える-

里山の個性でもある土留め石垣に注目して計画を進めた。現在の土留め石垣は、石と石の間が塞がれており、空気、水の流れが断たれてしまっている。隙間を埋め固めてしまうのではなく、樹木を植え、そこに根付く根によって保たれ、そして樹木は石垣が作り出す空気や水が抜ける環境によって健康を保つ、自然な共存関係を再構築する。

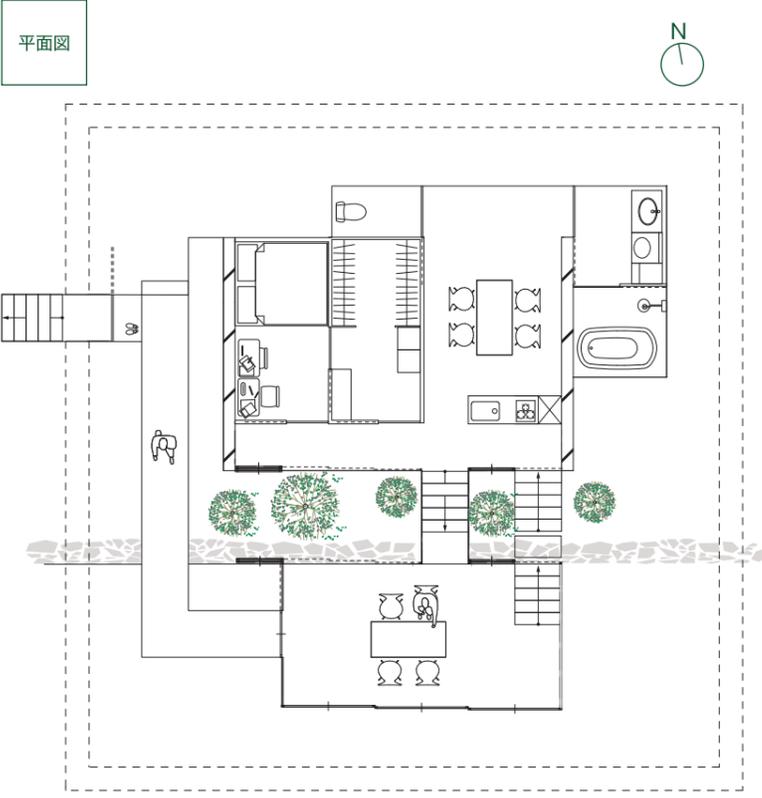


風景と生活をパトする -文化の継承-

建築の構え
敷地を訪れたとき、石州瓦で統一された民家と所々に現れるサビを印象的に感じた。自然との応答によって美しく風化する銅板と変わらない輝きをみせる石州瓦が、この地の風景の構成要素としてふさわしく思えた。



生活のパト -ゲストルームの役割-
農家さんが管理されているとされる田畑を除くと約90田畑が存在する。ベルソナの対象としたご夫婦を例に1世帯に対し3田畑を持ちうる想定すると、30世帯がこの地の生活に魅力を感じ住まうことを願えばこの地の文化、風景は紡がれるだろう。そのためにも他者を受け入れる設え、環境を豊かに享受する工夫など建築計画にできることは多分にあると考えている。



木製建具を開放すると半外部空間となり、雨、風、光の降り注ぐ中庭、周囲の自然環境と一体となる。夏場には蚊帳を張りゲストルームとして次なる住まい手を歓迎する。



半地下のダイニング。質量、厚みを持ったコンクリートと温かみのある木材に囲まれた落ち着いた空間。大地の蓄熱効果により年中安定した温熱環境を享受する。

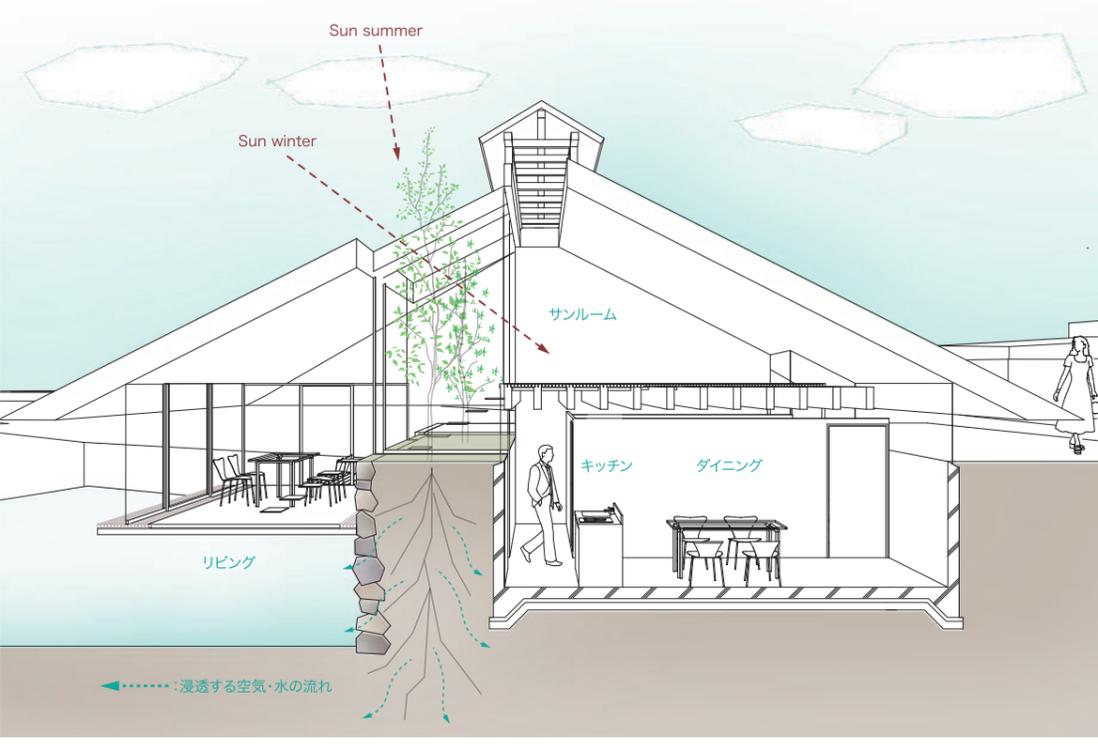
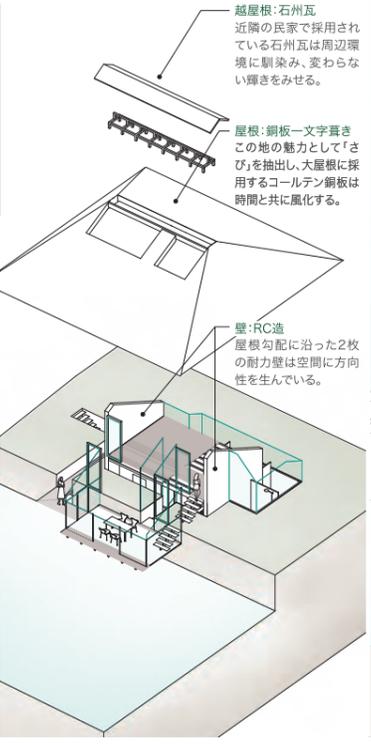
設計コンセプト

計画地へ向き合う課題として石垣に注目した。計画地の石垣は石と石の間が塞がれており、空気、水の流れが断たれてしまっている。そこで、石垣を健全な状態へ導く。またそれによって生まれる豊かさや周囲の自然環境を享受できる住まいを提案した。具体的な建築操作については、リビングの両端部の床をスノコ状としている。そのことによって夏季、水田からの涼風が床から抜け足裏で風を感じる。また、水田に浮かぶリビングの浮遊感を強めている。天井は白い塗装を施し、水面から反射する風景を室内に引き寄せる。水田というこの地の魅力的なキャラクターを今回のテーマである自然素材として扱い設計に取り入れることで、ここでしかない風景、豊かな生活環境を生み出すことに繋がっている。

石垣健全化の際に生まれた中庭の落葉樹は、夏の日差しを遮り、冬の日射を最大化する。天然のブラインドを備えた住まいとなった。1.5階サンルームは、ルーバー床となっており、一部吹き抜けを作ることでダイニングに柔らかな光を落とす。また蚊帳を張りゲストルームとして今後この地に住まうことを検討している家族を歓迎する空間としての広さを確保している。半地下のダイニング、水回り、寝室は、GLから1,700mm下がっており、土の蓄熱効果により年中過ごしやすい熱環境となっている。住まいにおいて安定した生活環境があることにより外部、半外部空間を贅沢に享受できると考える。

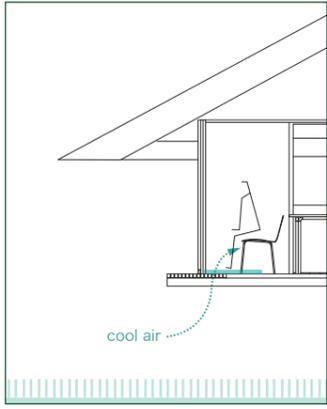
審査委員講評

地域の特性を活かした温熱環境による持続可能な住まいの提案である。その地域での社会的規範による建築の姿形や、そこから導かれる自然に着目し具体的な提案をしている点に好感がもてる。一方、もう少し建築構成要素が人にもたらす働きまで設計ができていたらさらなる可能性が感じられた作品である。

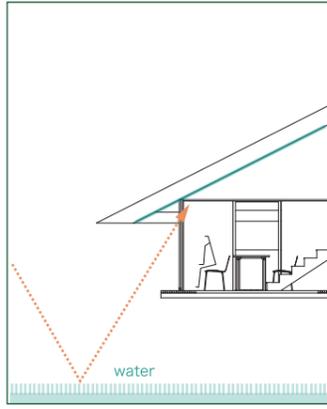


地球に生きる8つの設え

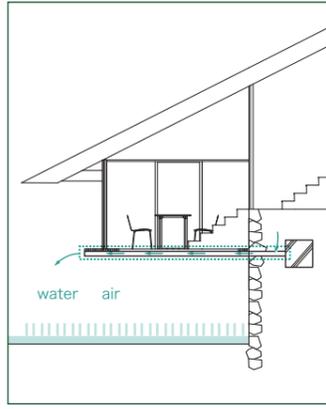
サステナブルな建築とは、地球環境負荷の低減、周辺環境への配慮、生活空間の豊かさなど、様々な視点を持って敷地の与条件を発見することで実現されるのではないかと。今回の敷地特性である水田と石垣の健全化、豊かな自然環境を享受するための設えを提案する。



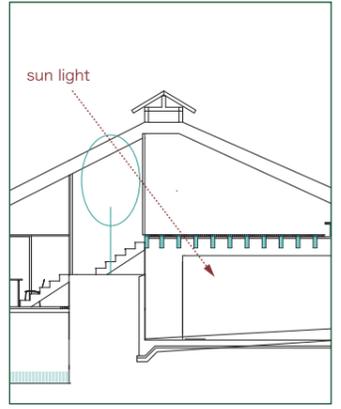
衣替える家
スノコ上の床によって夏季、水田からの涼風を室内に取り込む。冬季は断熱量を敷き、建築も衣替えるとする。



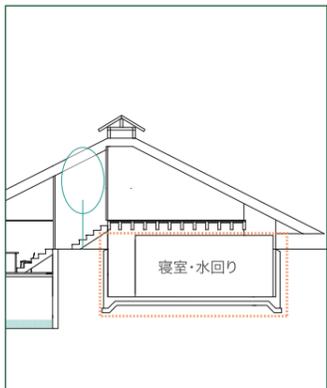
風景をつかまえる白天井
張り出した白い軒裏は、水田から反射した風景を映し出す。風の移ろいや紅葉など周辺環境の変化が室内に彩る。



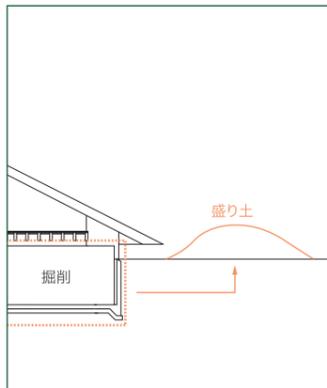
水と空気の循環を促す丸型梁
リビングを支えるパイプ梁は、地中の水や空気を抜く通気管の役割も兼ねる。



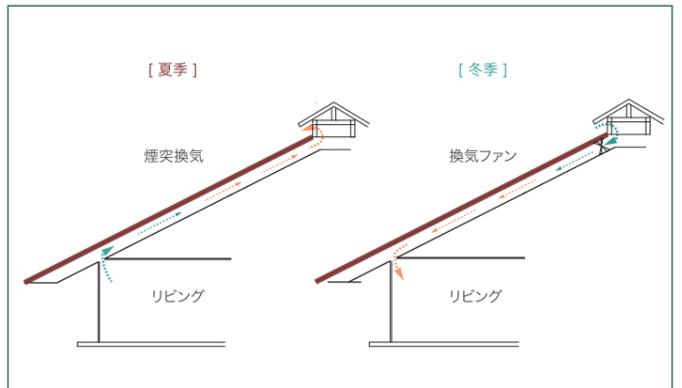
1.5階サンルーム
リズムカルに並ぶ梁は、直射光を和らげ落ち着きのあるダイニング空間をつくる。



安定した半地下
土の蓄熱効果によって安定した熱環境を享受する。年中過ごしやすい空間があることで、外部・半外部空間を受け入れることができる。



掘削ランドルケープ
掘削によって出る土を盛り土として活用し、周囲との距離感を調整する。



空気の流れを調整する大屋根
夏季：屋根に温められた空気による煙突換気によって室内に「風」を生み出す。冬季：屋根に温められた空気を上部に取り付けたファンによって室内に取り込む。



01 敷地/計画

敷地は、亜熱帯気候の沖縄県今帰仁村。都市から離れた農村部に位置する。住民は農業を営む夫婦とその子も2人であり、亜熱帯地域の自然と接続した暮らしを営んでいる。風や雨を建築内に取り入れ、亜熱帯気候の自然を十分に享受できる計画とした。この家により彼らの暮らしがより自然と接続されることを期待している。

02 腐敗を受け入れた新しい暮らし方

近代以降、建築や都市は腐敗を徹底的に遠ざけてきた。しかしその結果、自然との濃密な繋がりも同時に遠ざけることになってしまったのではないだろうか。今回の設計では腐敗というものを住居に取り入れることにより自然循環との接続を試みた。腐敗を受け入れることで自然の大きな循環の中に建築を位置付けることが可能になるのではないかと。その仮定の下に設計に取り組んだ。

03 腐敗から構法を考える

腐敗をとり入れることで住居は常に新陳代謝し続ける。RC造などの建物とは違い短期スパンでのメンテナンスが要求される。セルフビルドにより容易にプランを変更できる構法を取り入れることでメンテナンスを行うと同時に現状の生活スタイルに合わせて住居のプランを変更していくことができる。生活者は常に快適な暮らしを求め住居プランを変え続け、それにより生まれた端材はスケールを変え土中環境を改善するツールとなる。

04 主な構成部材

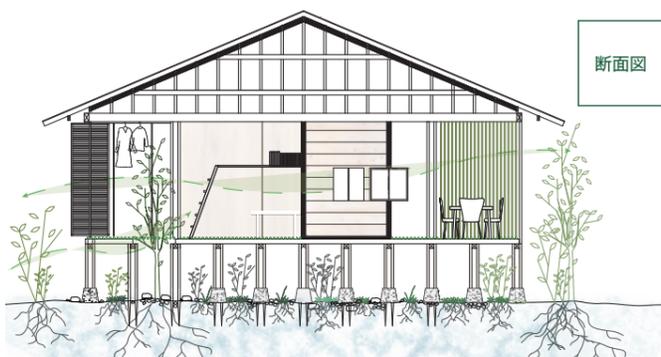
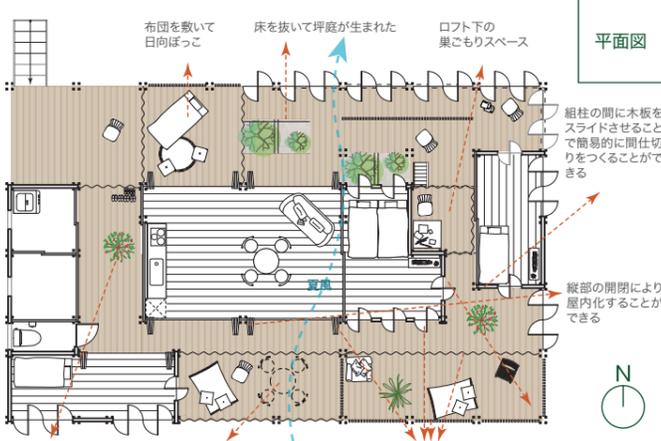
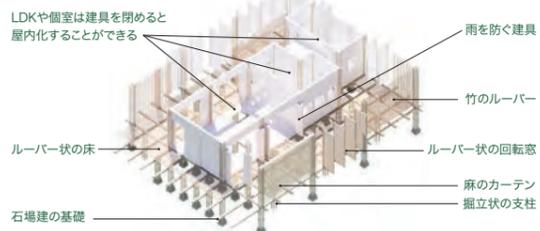


05 部材の転用

この住宅を構成している部材は腐敗後土中改善のツールとしてリサイクルされる。例えば柱などの木材は粉砕しウッドチップに加工してマルチングなどに利用される。床や衝立に用いている竹は杭土に加工し土壌に突き刺すことで空気と水を浸透させることができる。ほかにも麻状のカーテンや藁を使用した断熱材などは堆肥として用いることで土中環境を改善していくことができる。住宅の構成要素が徐々にスケールダウンし最後は土に還っていく。

06 腐敗を促進させる方法

中間領域にルーバーやカーテンなどの多孔質な建具を用いることで雨や風を取り入れ、インフィル部の不朽を促す。またルーバー状の床を用いることで下方からも空気が流れ、地面とより繋がることことができる。LDKや個室は板状の建具の開閉により雨を遮ることができる。



設計コンセプト

近年以降、建築や都市は腐敗を徹底的に遠ざけてきた。しかしその結果自然との濃密なつながりも同時に遠ざけることになってしまったのではないだろうか。今回の設計では腐敗を住居に取り入れることにより自然循環との接続を試みた。腐敗を受け入れることで自然の大きな循環の中に建築を位置付けることが可能になるのではないかと。その仮定の下に設計に取り組んだ。躯体には木や竹、カーテンには麻、断熱材には藁など時間と共に徐々に腐敗していく建材だけを用いて住居を設計する。RC建造物とは違い短期スパンでのメンテナンスが要求される。セルフビルドにより容易にプランを変更することのできる構法を取り入れることでメンテナンスを行うと同時に現状の生活スタイルに合わせて住居のプランの変更

ができるように工夫した。容易に増減築が可能なインフィル部分と建築に掛かる荷重を担保するスケルトン部を分けて計画した。スケルトン部分は腐敗を住居に取り入れることにより自然循環との接続を試みた。腐敗を受け入れることで自然の大きな循環の中に建築を位置付けることが可能になるのではないかと。その仮定の下に設計に取り組んだ。躯体には木や竹、カーテンには麻、断熱材には藁など時間と共に徐々に腐敗していく建材だけを用いて住居を設計する。RC建造物とは違い短期スパンでのメンテナンスが要求される。セルフビルドにより容易にプランを変更することのできる構法を取り入れることでメンテナンスを行うと同時に現状の生活スタイルに合わせて住居のプランの変更

審査委員講評

長い期間でセルフビルドの増減築や修繕を想定した家は図らずとも注目度は高くなり、地域との関わりは無視できません。沖縄県今帰仁村は19の集落からなり、住民同士の結びつきが強いと推察しました。内外の中間部分が腐朽することで家が自然に選ばれることを促しつつ、誰もが家づくりに参加しやすい設計の工夫によって、自然環境保護への意識を高め合うご近所付き合いが生まれるかもしれません。



01 イエからスマカへ

家と庭を分離し、外部とのつながりを無くしている現在の家に対して、「外部環境とつながるスキマを有し、自然の営みと関わり合う」動物の棲家のような住まいを提案する。さまざまな自然の営みを取り込むことで人のための家から多様な生物が共生しあう棲家となる。

02 四季を伝える木々が彩る長野県松本市

長野県松本市は都市部にも関わらず自然豊かな環境が形成されており、カツラ並木を含めさまざまな街路樹が四季を彩る町並み特徴である。町の街路樹の多くは落葉樹で秋になるとたくさんの落ち葉を落とし問題となっている。また、年間をおして日照率が高く、冬は放射冷却現象によって朝晩の気温はかなり低くなることが多い。

03 自然が生む熱とつながる住まい方 ~発酵熱を用いた可動式床暖房の提案~



設計コンセプト

「熱」はどこにでもあり、もっとも我々の身近にある自然素材である。しかし今、私たちは自然の熱を遮断しエアコンで室温を調節する暮らし方をしている。このような暮らし方は、私たちが本来持っている外部環境への感受性を奪っているのではないだろうか。そこで、これからは「自然の営みが生む細やかな環境の変化を意識し、受け入れながら暮らすための住まい」が必要だと考えた。提案にあたってはまず、落ち葉による温床とその熱を蓄えるための小さな部屋を採用し発酵熱を暮らしに取り込めるようにした。発酵熱は日光のあたる量によって発酵速度と熱量が変わる特徴があるため、温床を可動式とすることで「自然の

営みが生む熱を知覚し、身の回りの自然と向き合う暮らし」が生まれると考えた。また、冬に備え木々の落ち葉を皆で集める暮らし方は集まって住むぬくもりも感じさせるだろう。次に立面・平面的に隙間を作ることで風・光・匂いといった外部環境だけでなく植物や小動物が入り込むことができ、色々な生物の居場所になると考えた。通常、壁面積が大きくなることは断熱性の観点から敬遠されるが、この住まいでは季節に応じて外部環境を調整できる。そのため外気の影響を受けやすくなるというデメリットがメリットに変わると考えた。住人が自然の営みと共生する中で、全ての生物が共生出来る環境を維持しようと思える場所こそこれからのサステナブルな住まいなのではないだろうか。

審査委員講評

日本の気候を活かして落ち葉を自然エネルギーに活用する、その新たな仕組みづくりへの挑戦に魅了された。このような取り組みは小さなコミュニティだからこそ実現性が高くなる。セキュリティ、コミュニケーションの在り方も含めて、郊外の住宅地開発の可能性を広める事例と言えるだろう。



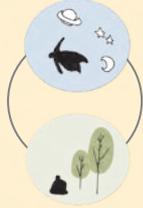
最適な睡眠を取るための条件とは、
身体精神共にリラックスした状態だと考えられる。

●身体のリラックス

身体中の力が抜けて、まるで浮いているかのような感覚に陥る時。

●精神のリラックス

自然の中へ訪れることによって生まれる、都会にいと気づきにくい
自然の些細な音や風、匂いを感じる時。



01 敷地

精神身体共にリラックスした状態が
睡眠に最適な条件だと考え、敷地は
スイスのツェルマットとした。
ツェルマットは崖の上に位置し、石で
できた階段を登った先にある。
その下には母屋があり、湖と川が流
れている。



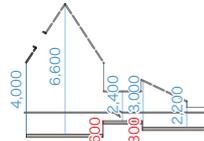
02 風と光

アプローチから寝室まで全ての空間が直線につながっているの
で、開けた視界となり光や空気が直線に伝わる。
エアコンも扇風機もいらぬ自然の中での生活が理想的である。



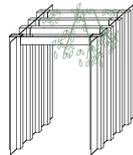
03 躍動感

床と天井に動きをつけることによって、極力仕切りの少ない直線
的な間取りであると同時に、躍動感のある空間をデザインした。



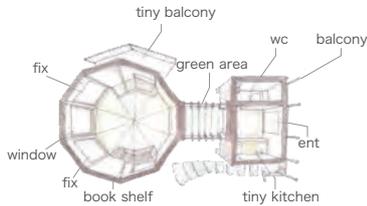
04 PBB

真ん中の廊下は、直線の家でありながらも空間の違いを楽しむ
ことのできる飛行機へ乗る前のPBBを参考にデザイン。
また寝室へ向けて浮遊感をプラスするためにも最適なデザ
インだと考えた。

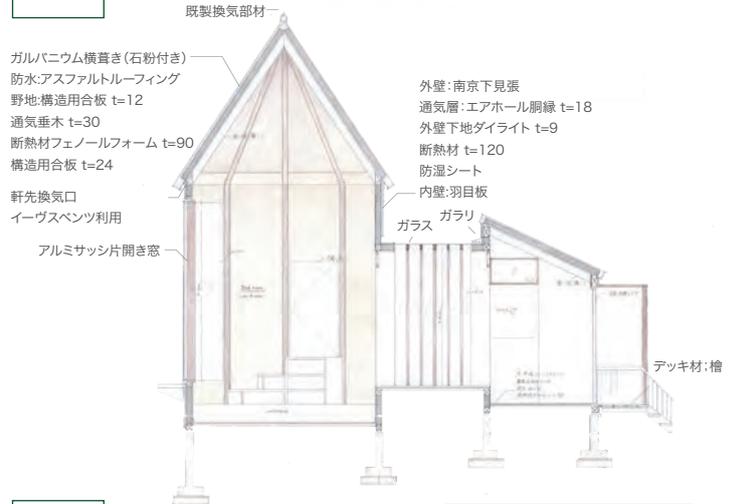


05 動線

建物全体がシンメトリーとなっている。
中央正面の玄関から中へ入り左にトイ
シ、右に小さなキッチンがある。寝室は
一面マットレスが敷いてあり、動くこと
が億劫な施主にとって理想的な空間に
なっている。手の届く範囲に本棚や窓
があり、1日の流れを窓から眺められる
のもこの設計の魅力である。



立面図



平面図



設計コンセプト

サステナブルとは、地球の環境を壊さず、資源を使いすぎず、
未来の世代を美しい地球で平和に豊かに暮らすということ。
そこでル・コルビュジェが設計したカップマルタンなどから
“5坪”という最小限の空間の中でいかに快適に過ごすか
焦点をおき、母屋があるていで設計した。
生きる上で最低限必要なことは“食”“運動”“睡眠”の3つで
ある。その中で私は“睡眠”に焦点をおき、寝室に注目した。
まず、安眠を取るためには身体精神共にリラックスした状態
が最適だと考え、精神的には“環境”で、身体的には“空間”で
表現した。敷地はスイスのツェルマット地方に一目惚れした。
四方八方を山々に囲まれ、大自然の中で安眠をとる。その
ため寝室は十角形の多角形とし、沢山の方向を臨めるように
した。柱は全て地元で採れるカラマツとし、FIXにはめ込む

窓は、バイオにより分解される素材とする。いつか、山が海に
沈み、新たな世界が始まる時、形は残れど、地球の遺産の
一つとして残したい。外壁も地元で採れるカラマツとし、南京
下見張。屋根には山を模したとんがり帽子・鉄平石を使用
し、年輪を重ねた苔がいつしか彩り始める。
快適な睡眠のため、生活空間はミニマムに、できるだけ壁の
区切りをせず、FLの高さで空間の入り口をそれぞれ演出
する。入り口のテラスには、花を植え、草が育ち、小鳥が集う、
そんな未来を想定した。
極力少ない素材でより自然に溶け込む形の住宅を、私は
提案する。

審査委員講評

最小限の空間で快適な睡眠を
得るための構成を考えた作者
の意欲的な住まいの提案である。
フロアレベルと天井の操作に
よって抑揚に富んだ天井高となる
空間や、アプローチから睡眠を
とる空間をつなぐ渡り廊下のような
オブジェクトは、日常から非日常
へと誘うシークエンスを生んで
おり極小空間である茶室のよう
な小宇宙を体現している。